

國學院大學學術情報リポジトリ

『古事記』に読む古代の心：
祭祀遺跡はなぜそこにあるか？：
公開学術講演会(平成24年10月27日)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辰巳, 和弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001712

公開学術講演会(平成24年10月27日)

『古事記』に読む古代の心

—祭祀遺跡はなぜそこにあるか?—

辰 巳 和 弘

ただいまご紹介いただきました、辰巳でございます。

私の大学時代、とくに大学院に入りました年には、いわゆる東大紛争がありました。全国の大学が大変な時代でした。それで、大学院には入ったけれど、大学というところは勉強するところではない、研究するところではないということで、榎原考古学研究所に出入りさせていただいたりしていたのですが、たまたま修士の一年目に、静岡県から、当時は國學院も多少関係しているのですが、浜松市に伊場遺跡という弥生の環濠集落や律令期の官衙遺跡があって、その発掘を静岡県がやらなければならないということで、発掘調査の要員に来ないかという話が2月ころにあって、4月から静岡県教委に採用となり、学生と公務員の二足の草鞋をはきながら修士を修了しました。採用が高校教員の待遇だったものですから、採用から4年たって、29歳のときに高校の現場に立つことになりました。

焼津中央高校です。職員室には、現在は民俗学者として著名な野本寛一先生がいらっしゃいました。國學院のご出身であることはみなさまご承知のことでしょう。当時の野本先生は己の民俗学の確立にむけて、民俗踏査に実にエネルギーな活動をされていました。私はそうした野本先生のお姿を拝見して、自分の学問をどのように作っていくか、一人で模索する新米教師でした。

そんななか、考古学を学問としておりました私には、当時の考古学界が、

いわゆる遺跡から検出される遺構や遺物という「モノ」自体の研究に夢中で、その背後にある人の営為、人の考え、まさに「心」=思想というものを追究する姿勢がみられないことに不満で、いかにして「モノ」から往時の思想を解明できるかということに頭を巡らす日々が始まり、そして今があるという訳です。

先日、この度の講演会のポスターを送っていただきましたところ、辰巳がこのテーマで話すならということだろうと推量いたしますが、その上半分に静岡県浜松市にあります祭祀遺跡、天白磐座遺跡の写真を掲げていただきました。本日はそのお誘いに乗ることにして、まずこの祭祀遺跡からお話を始めたいと思います。

この遺跡は1988年に発見いたしました。私が発見したと言うと、いつも当時の学生達は「違うぞ、見つけたのは私達だ」と怒るのですが……。私は式内社^{いい}渭伊神社(八幡宮)の背後に大きな岩の露頭群があって、こういうのを磐座と言うのだろうと説明するために遺跡分布調査の一環として学生達をそこへ連れて行き、解説を始めようとしたところ、何人かの学生がじっと下を向いたままではありませんか。彼らはそこに古墳時代の手づくね土器が幾つもほぼ完形で転がっているのを見つけたのです。「うそだろう……」。そういう状況でした。



天白磐座遺跡

小生のプロフィールの下のカラー写真をご覧ください。南から見た夜の情景です。左右に大きな岩が並び立つ厳かな光景です。ポスターの写真は昼の光景ですが、昼はなかなか気に入った写真が撮れないのです。周囲の木の枝葉が白い岩に影を落としてむらになってしまうからです。発見の翌年の夏に発掘をしましたが、好天には恵まれたのですが、遺跡の全景写真の撮影には苦労しました。1993年に刊行されました『日本歴史館』(小学館)を作る時、今さら沖ノ島の祭祀遺跡でもない、何か新しい遺跡の写真を見開きで載せたいということで、この遺跡に注目していただきました。カメラマンを連れていったら、昼間はどうしても絵にならない。思い切って夜やりませんかということになりました。それでライトを3方向から照らして撮影しました。なかで左の巨岩の屹立した壁に強い光線を当てているのに注意していただきたいのです。その平面直下が幾つもの手づくね土器が採集でき、発掘でも祭祀の場であることが確かめられた地点です。

再び遺跡の発見時に戻ります。並ぶ二つの巨岩に挟まれた狭い空間からも、学生が「先生、こっちにも落ちていますよ」って。そこには渥美半島で焼かれた経典を埋納するための経筒外容器の破片がたくさん落ちていたのです。あっという間に、大きなかけらを30数点も拾いまして、びっくり仰天したというわけです。

そんな遺跡の発見なんて、今どき考えられません。玄界灘の真っ只中の沖ノ島とは違い、集落に隣接する、誰でもすぐに立つことができる場所で、なぜ今まで発見されなかったのか不思議な思いでした。この遺跡に遭遇できたことが、私の研究の方向を決定づけたと言えます。

さて今年、和銅5年正月28日に『古事記』が献上されて1300年にあたります。しかし奈良県は意外に燃えてくれません。一昨年の平城京1300年の遷都祭で燃え尽きたのではと思えるくらいです。稗田のある大和郡山市と、多神社のある田原本町でシンポジウムや講演会が催される程度。むしろ東京で『古事記』に関係する出版が相次ぎ、そちらに後押しされるように関連の催しが奈良でも開催されるようになってきたかなと感じています。今日は、

考古学からいかに『古事記』と関連づけてお話ができるか、いささか心もとなく思っておりますが、お付き合いいただければ幸いです。

1、天白磐座遺跡の〔場〕

レジュメの冒頭に、祭祀と祭祀遺跡に関する私の認識を書きました。「祭祀とは、己や己が所属する集団の意志や力のみでは達成が困難と思われる事態を克服し解決するため、『人知を超越した靈威をもつ隠れたモノ』 = 『神』の存在を信じ、その靈威に働きかける行為をいう。それは『神の領域(存在)』を認知することであり、『神の領域』と『人の領域』の接点に神が顕現し、靈威の発動があるという認識のもと、マツリゴト(祭事・政治)にかかわるさまざまな考古資料は意味をもつ」。

考古資料の属性を見極め、そこに先人の精神や思考、さらには列島に培われてきた日本文化の基層を解明するうえで『古事記』が必須の古典であることは間違いありません。『古事記』はもちろん、『日本書紀』・『風土記』・『万葉集』等々、考古学研究者も、これらの古典をよく読み込んだうえで、遺跡(遺構・遺物)と対峙しなければ、先人の心に参入することは難しいと考えます。今日は特に、マツリゴトにかかわるとみられる遺跡が存在する「場」の意味、なぜそこにあるのか、なぜそこなのかを考える、私の日ごろの営みの一端を皆さんにご紹介させていただきます。

「遺跡」は、英語で site です。それは、場や位置という意味をあわせ持ちます。単なる食や住という日常のなりわいのうえに営まれたとは考えられない遺跡を理解するうえで、その場のもつ意味を見極めることがなにより大切です。天白磐座遺跡の発掘と報告書作成という仕事は、私にそうしたことを気づかせてくれました。

【図1】は、浜名湖の北東方向、奥浜名湖に流れ込む都田川の支流が形成した小さな盆地です。現在の行政区画では浜松市北区引佐町井伊谷いなさ いいのやと呼ぶ地域です。地図の北から南に、緩やかに蛇行して流れるのが井伊谷川。それからもうひとつ、西から盆地に流れ込み、井伊谷川に合流するのが神宮寺川で



図1. 古代渭伊郷の主要遺跡(辰巳, 2006)

す。このふたつの川により形成されたのが井伊谷盆地です。井伊谷という地名にお気づきかと思いますが、あの近世大名として知られる井伊氏が興った地なのです。井伊氏は三方ヶ原の合戦の少し前に、家康に与した^{くみ}国人領主で、やがては彦根の大名になることはご存じと思います。

引佐町は古代の遠江国引佐郡渭伊郷にあたります。「紀伊」という国名が記紀に「木」とみえ、出雲の斐伊川の名が『古事記』には「肥河」とあり、「斐伊」という郷名のもとが「樋」であると『出雲国風土記』に見えます。ようするに母音 i を重ねることで、二文字地名が誕生した例です。井伊谷という地名を合わせて考えれば、「渭伊」という地名が「井」に淵源をもつと理解されます。

天白磐座遺跡は【図1】の左寄り、神宮寺川が大きく蛇行する地点、白抜きの矢印の先端にグレーの円で示した位置にあたります。井伊谷盆地の東に目を移していただくと、丘陵上に北から南へと継続して4世紀末から5世紀に継続して築かれる首長墓を明示しています。北から北岡大塚古墳(前方後方墳)・馬場平^{ばんばのひら}1、3号墳(前方後円墳)・谷津古墳^{やづ}(大型円墳)と、安定した首長系譜の存在が井伊谷に確かめられます。天白磐座での祭祀を行った首長の奥津城とみてよいでしょう。

磐座は薬師山と呼ばれる比高30メートルばかりの神奈備型の小丘陵の頂きにある写真のような巨岩の露頭を中心にした小規模な範囲です。どこからか土砂が流れ込むこともなくほとんど堆積土が形成されなかったことが、遺跡の発見を容易にしてくれたわけです。なかには苔がはえた状態の手づくね土器すらありました。発掘では、巨岩の直下から多量の手づくね土器に混じって、刀・鉾・やりがんな・鏃といった鉄製武器や工具、またわずか一点ですが滑石製の勾玉も出土しました。さらに周辺の広い範囲に平安時代前期ころまでの須恵器や陶質土器が採集でき、長期にわたって祭祀の行われたことがわかります。

発掘でも、ふたつの巨岩の間では多数の渥美製経筒外容器の破片が出土し、10個体以上が埋納されていたものと考えられます。ただ、残念ながら遺構はすべて破壊されておりまして、調査では巨岩の周囲の石のすべてをチェーンブロックで引き上げて確認しましたが、経塚の遺構を確認することはできませんでした。容器のなかには、秋草文を刻んだ優品もあり、塚に納められていたであろう小さな和鏡も採集できました。外容器は、12世紀後葉の年号を刻んだ類品が三重県朝熊山や沼津市三明寺等の経塚から出土しているのが参考になります。

井伊氏の伝承によれば、始祖の共保は寛弘7年(1010年)に、井伊谷にある八幡宮社前の井戸から生まれたといいいます。【図1】に龍潭寺が見えます。井伊家の菩提寺で、そのすぐ南に「井伊氏祖出誕伝承の井戸」があります。現在も龍潭寺による祭祀が行われています。その八幡宮というのは式内社涿

伊神社のことで、16世紀に天白磐座のある薬師山の麓に遷座しますが、それまでは龍潭寺の地に一画を占めており、その社前の井戸が始祖誕生の場とされます。

井伊氏は南北朝期には南朝方に与して活躍し、やがて家康のもとに参加することになるわけですが、その時期の居館と思われる遺構が、当該の井戸の東の水田中にあります。発掘で確かめたわけではありませんが、明治時代末の地籍図に、耕地整理で失われた地割りが濠と土塁を巡らせたふたつの方形区画が明瞭に認められます。その居館に隣接してある始祖誕生の井戸。そこに井伊氏の始祖神話創出の背景がうかがえるではありませんか。

経塚に話を戻しましょう。経塚では奈良吉野の金峯山経塚、藤原道長が寛弘4年(1007年)に納めた経筒は有名です。さらに和歌山県高野山奥の院にある弘法太子御廟の瑞籬内、また京都伏見の稻荷山の頂きにも営まれています。そのように、社寺仏閣の境内の霊地とされた場所、それから神奈備山の頂きなど、そういう聖地・霊地と考えられた場に経塚は営まれます。

そうなりますと、天白磐座でもそこが古墳時代から平安時代前期まで磐座

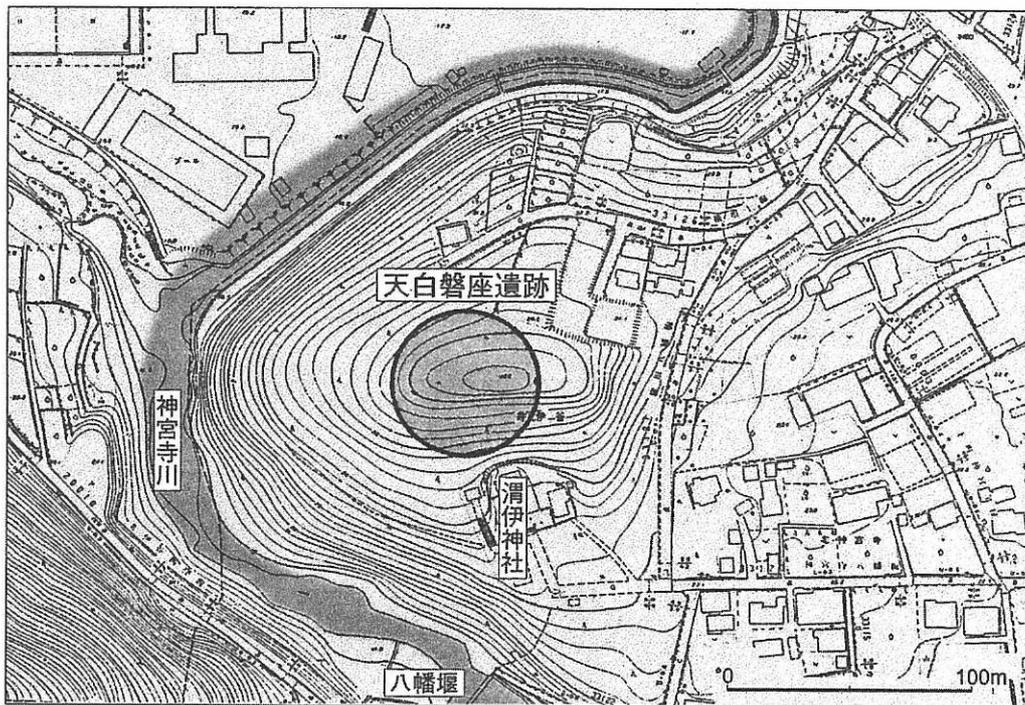


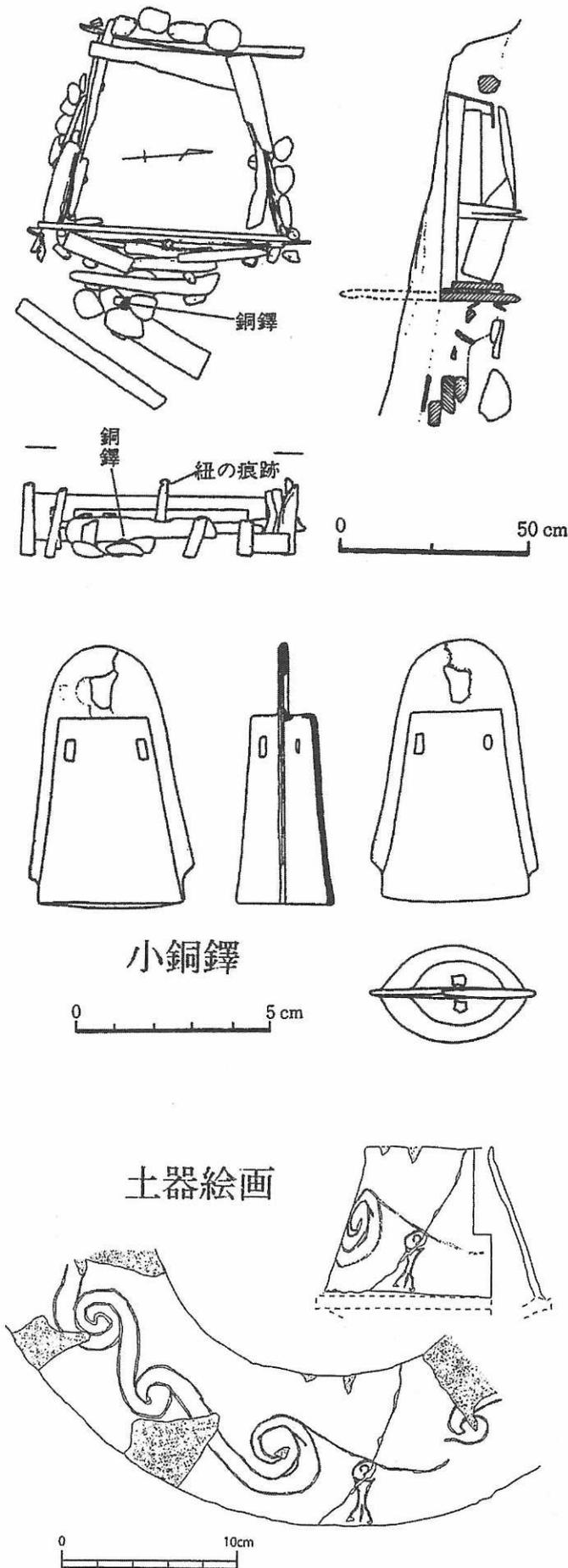
図2. 天白磐座遺跡と神宮寺川の旧流路(辰巳, 2006)

祭祀が行われていた聖地であるという記憶が人々の念頭にあったからこそ、そこに経塚が営まれたと考えられ、その経塚造営の作善を行った主体者は、磐座での祭祀をおこなってきた古墳時代以来の地域領主の系譜を引く人々のほかには考えられません。12世紀当時の井伊谷の有力者といえば井伊氏のほかになく、天白磐座遺跡を間に置くことによって、井伊氏が古墳時代に遡る豪族であったことを説き明かすことができるのです。

【図2】をご覧ください。神宮寺川が大きく蛇行して帯のように磐座のある薬師山の麓を流れますが、そこに「八幡堰」という堰があります。地元では「ハチマンセギ」と呼んでいます。そこから左右両岸に分流しまして、その水が井伊谷川以西の盆地の水田に配られます。この堰の存在は文献上は近世までしか遡ることができませんが、地点からみて条里が施工された奈良時代から、さらに古墳時代前期まで系譜を辿ることができる井伊氏の勃興の段階までその存在を推定できそうです。八幡堰は井伊谷の水分り^{みくま}であり、そこに「井」という地名の淵源があると考えられます。堰も「イ」です。そこに井伊谷の地名の発祥をみてとることができます。古墳時代前期、井伊氏の祖が堰を築き井伊谷の盆地に水田を拓いたのでしょう。

天白磐座遺跡には東名高速道路の三ヶ日インターから約1時間でたどり着けます。すばらしい景観をぜひご覧ください。私は今でも、車で静岡に出掛ける際には、いつも磐座を訪ね、その風景のなかに身を置くことにしています。そこは風の通り道。発掘の際にはいつも風の動きを感じ、そこが神の顕現する場であることを体感しました。おそらく古代井伊谷の人々も同じだったでしょう。浜名湖の湖北一円にはいたるところに巨岩の露頭があります。発掘調査の折りに多くの巨岩を確かめましたが、ひとつとして古墳時代に遡る遺跡を見いだすことができませんでした。水分りの地点にある薬師山頂の巨岩群(天白磐座)しか神の座はなかったのです。

龍潭寺の一面にあった式内社渭伊神社が16世紀に薬師山の麓に遷座したのも、そこが古代以来の井伊谷の産土^{うぶすな}の霊地と観念されていたからにほかなりません。



話を展開しましょう。【図3】をご覧ください。岡山県真庭市の下市瀬遺跡で発掘された弥生時代後期の井戸です。中国自動車道建設に伴う発掘調査で検出された遺構です。傾斜面の水が自噴する地点を板で四角く囲み、そこに満ちる水がオーバーフローしていたようです。低い側には板を敷いた水汲み場があって、そちらの井戸側の中央に一本の杭が打ち込まれていて、その上端近くに紐を結びつけた痕跡があり、その下に高さが7センチばかりの小銅鐸が転がり落ちた状態で出土しました。銅鐸には紐を懸けて吊るすための紐がありますが、その内側の一部が摩滅して擦り減り、そこからひび割れが生じている状態でした。銅鐸が水汲み場に吊るされていたことは間違いありません。

ところが考古学ではそこからの思考が展開されない

図3. 下市瀬遺跡の井と出土遺物
(岡山県教委. 1974) (山陽新聞社. 1992)

のです。それは弥生人の営為を考え、歴史を再構築するという研究者の本分を放棄したに等しいと私は考えます。中・小型銅鐸には舌と呼ぶ、棒状の振り子がぶら下げられる例が幾つもあり、銅鐸を揺らすことによって舌が鐸の本体に当たり音を発するわけです。当該の小銅鐸が、ただ杭にぶら下げられていただけとは到底考えられません。音が鳴らされたはず。銅鐸の内側には舌が垂下されたとみなければ、銅鐸を杭にぶら下げる意味はありません。木製の舌もあったでしょう。岡山県倉敷市にある矢部南向遺跡の竪穴住居の床に埋納されていた小銅鐸のなかから、土に混じって白い骨粉が認められた事実を目を向ける研究者はいません。そこに動物の骨、例えば鹿の角などで製作された舌があった可能性は極めて大です。下市瀬の小銅鐸にも舌があって、腐朽したか、流失してしまったと考えるべきでしょう。

そうなりますと、なぜ井戸の前、水汲み場で銅鐸の音を鳴らすのか。その音を何処に向かって響かせたのかという問題に歩を進めなければなりません。我々がお宮にお参りして鈴をならす行為につながる心意がそこに感取されます。湧きあふれる水をもたらせてくれる世界に向かって発音している、平易に言えば、水への感謝ということになるでしょう。そこに神が観念されたことを下市瀬の発掘から学びとることができ、それこそ水の神ということになります。

【図3】の下に掲げました土器絵画は長頸壺の口縁に描かれたものですが、中央に頭上に棒のような道具を振りかざした人物があり、棒の一方の先は連続する渦巻きにつながっています。その渦巻きはいったい何を意味する図形なのか。渦巻きと言えば水をイメージさせるわけですが、弥生時代の絵画を研究されている方ならすぐおわかりで、これは竜をイメージさせる図形です。この絵画はどうやら竜を御す人物を描いたものと理解できそうです。竜は水の精です。そうした絵画土器が銅鐸といっしょに出土しているということは、まさにこの場で、水を汲むたびに小銅鐸を鳴らし、水神を祭った蓋然性が高くなってくるではありませんか。

2、王権祭儀の場＝高殿

さて2に移りましょう。「王権祭儀」とはより政治性の高い祭りのことです。記紀によればヤマト王権の大王たちは、政治的難局に遭遇し、その対応に迷った際、しばしば夢に神の託宣を請い、神託によって物事を執行してゆくことが語られています。

【史料①：文末参照】は皆さんよくご存じの『古事記』崇神天皇段にみえる大神神社の創祀にかかわるくだりです。大物主大神が天皇の夢に示現して、意富多^{おおみわ}多泥古^{かんどこ}という人をもちて、我を祭らせれば、国家は安らぐであろう告げるわけです。夢を見るためには寝なければなりません。『古事記』はその設えを「神牀」と表記しています。日ごろの牀ではなく、夢に神が来臨する聖なるベッドの意であることは確かでしょう。まさにそこが、冒頭で祭祀についてお話ししました「神の領域」と「人の領域」の接点にあたるものと理解されます。

この「神牀」という名称は『古事記』にしかでてまいりません。しかし『日本書紀』の崇神7年条【史料③】にもほぼ同じ場面がありますが、そこでは

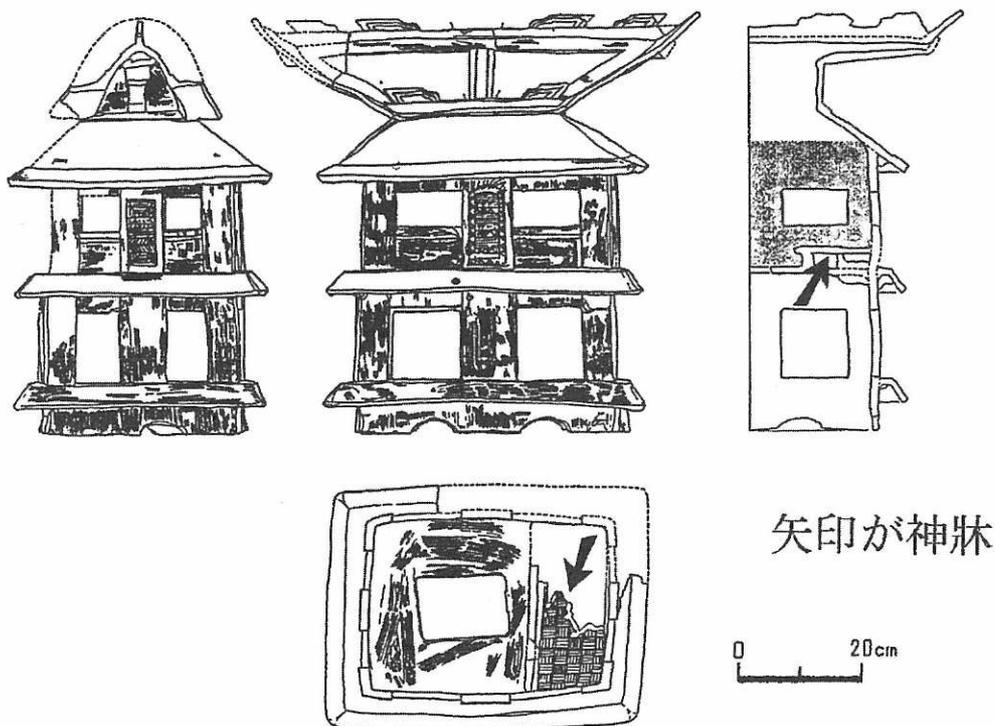


図4. 美園古墳出土家形埴輪(大阪府教委. 1985に加筆)

夢のお告げを請うにあたり、天皇は沐浴齋戒して、殿の内を清浄な空間としたうえで夢を請い、夢中に現れた大物主神が『古事記』と同様の託宣を告げるわけですが、そこに「神牀」という名は見えません。しかし清浄な殿中に、沐浴齋戒した天皇が神託を得るために寝る聖なる設えの存在がうかがえます。やはり「神牀」があったとみるべきでしょう。

『古事記』にはもう一カ所、安康段に「神牀」が見えます【史料②】。そこでは天皇が「神牀」に御寝ませる時、殿の下で先后の子である目弱王が遊ぶという場面設定がなされています。どうやら「神牀」のある殿は高床建物だったことがうかがえます。より「神の領域」に近く「神牀」を設けたものと考えられ、大社造りに代表されるように、後の神社建築が高床であることともつながると思います。

さてここで考古資料のなかに「神牀」を造形した遺物があります。大阪府八尾市にあった美園古墳出土の家形埴輪【図4】です。ご覧のとおり高床建物です。古墳時代中期初頭の遺物です。図中、二か所に矢印を入れてあります。高床の屋内に、床より一段高くなった部分があり、その上面には網代状の表現がなされています。残念ながら半分近くは欠損していますが、明かにベッドであることがわかります。

高床の床の中央は四角い穴があげられています。けっして埴輪を焼成する際の火回りを考えた造作ではありません。この埴輪には床下部にも高床部にも、四方に開口部が十分とられています。おそらくハシゴを架け、そこから床を突き上げるように高床屋内に参入する部位を表現したのでしょう。宮内庁が所蔵する履中天皇陵で採集されたハシゴを造形した埴輪は、高床の家形埴輪に付設されたものでしょう。さきほど銅鐸の舌の素材のところでお話ししましたように、さまざまな素材が用いられていたことを想定すれば、ここに木製のハシゴが架けられていたとみなすことが穏当でしょう。柔軟な解釈をしなければ古代は見えてきません。さらにこの家形埴輪の高床屋内の壁が赤く塗られている点にも注視しなければなりません。

そこで皆さんよく考えいただきましたのです。方墳の美園古墳には周囲に濠が

めぐらされ、墳丘上縁に沿うように壺形埴輪が透き間なく立ち並び、その内側の限られた空間に高床の家形埴輪が置かれていたことが復元されます。周濠の外から古墳を眺めたら、墳丘上の真ん中に置かれた家形埴輪は、その入母屋屋根の大棟部分が飛び出す程度。壺形埴輪列の透き間から家形埴輪の存在もわずかに覗きみえますが、とても高床屋内にあるベッドや内壁が赤く塗られていることなど目にはすることはできません。現在の感覚であれば、どうしてそのような無駄な造作をするのか、見えないなら網代文様を刻んだベッドを造形する必要などないではないか。

逆に考えるべきです。当該の家形埴輪はそうあるべきなのです。赤く塗られた屋内にはベッドがなければならぬのです。赤彩されるのは、そこが聖化された清浄な空間であることを物語るのでしょう。現世の人間に見せるための造作ではないのです。当然、古墳の被葬者のためのものと考えざるべきではありません。被葬者のための建物がそこにあるのです。そういうことを見通さなければ、当該の遺物は生きてきません。考古学の報告書では、古墳を発掘

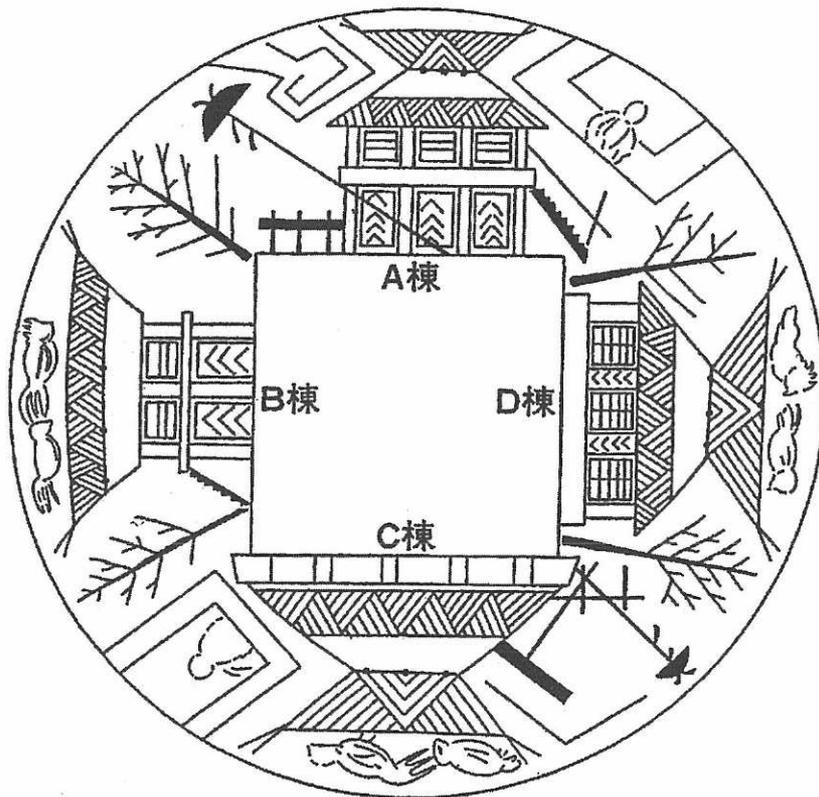


図5. 家屋文鏡の家屋図(佐味田宝塚古墳)(辰巳, 1992)

しました、埴輪が出土しました、その出土状況や形状はこうですよとは書かれますが、そこから先がない。なぜそこに、そのような形をした遺物が存在したのかという部分です。それを読み込まなければ考古学は歴史学のなかでいつまでも主体的な発言ができません。

【図5】は、美園古墳よりちょっと前の時期、奈良県河合町にある佐味田宝塚古墳出土の34面の副葬鏡のひとつ、家屋文鏡と呼ばれている直径約23センチの鏡の図文です。それぞれ形の違う4棟の建物が表現されています。それぞれの建物の説明はいたしません、おそらく古墳時代前期のころの、大和における豪族屋敷、あるいは王宮と言っているかもしれませんが、そこにあるべき、言い換えればそこを象徴する建物を表出したものと考えられます。

そのうち「A棟」は4棟のなかでも別格の建物と考えられ、貴人の存在を象徴する衣笠が差しかけられて、一方の妻側には手摺りつきのハシゴが架けられ、高床建物であることがわかります。さらに屋根の形状は美園古墳の家形埴輪と同じ入母屋です。屋根の上に注目してください。衣笠と屋根の間に雷文と呼ばれる鉤の手の図文表現があります。高床に架かるハシゴの上にある二重のコの字形の図文も雷文を表現したとみています。そのなかに人物らしき姿があるでしょう。稲妻とともに高床建物に來臨する神の姿と私は見て取りたいのです。雷や稲妻が顕現する神の表象であることは、『日本書紀』の雄略7年条にみる三諸岳の神を姿を見ようとする話をはじめ、『常陸国風土記』にみえる嘯時臥山くれふしの説話、さらには『山城国風土記』が伝える可茂社ちいさこべのすがるの伝承など幾つもあげることができます。『日本靈異記』冒頭の子部栖輕の雷捕捉譚もその変容にほかなりません。家屋文鏡のA棟の図柄は、貴人が扱ります高床建物に神が來臨する情景を表現したものと見なせます。まさに古墳時代前期の段階で、古代人は既に神を人の姿として認識していたことが窺えます。

そうしますと美園古墳の高床の家形埴輪と家屋文鏡のA棟の建築様式が極似していることをみると、両者は同じ属性をもつ建物を、一方は形象埴輪と

いう立体、他方は絵画と、手法を違えて表現したとみなせます。『日本書紀』には、天皇がさまざまな王権祭儀を行う「タカドノ(高殿)」と呼ぶ建物がみえますが、まさに高床の祭儀建物にほかならず、美園例や家屋文鏡A棟こそが「高殿」の姿を表現したものでしょう。

もう一度【図5】をご覧ください。4つの建物の間には樹木の表現があります。これをただ埋め草として描いたにすればA棟とD棟の間、またD棟とC棟の間の樹木表現は何か無理やり狭い空間に押し込むように描いたとしかみえない点にも目を向けることにします。当時の王宮を鏡というひとつのキャンバスに表出するにあたって、樹木を描き込まなければならなかったと解釈すべきです。家屋文鏡の樹木表現にまで、それがもつ意味を問いかけることにしましょう。

3、聳立する聖樹(宇宙樹)＝ヤマト王権と百枝槻

家屋文鏡の樹木表現は針葉樹ですが、『古事記』にはヤマト王権の王宮にももえつき百枝槻があったことが伝えられています。百の枝をもつ槻。それはたいへんな巨樹であったことを物語る物言いにほかなりません。

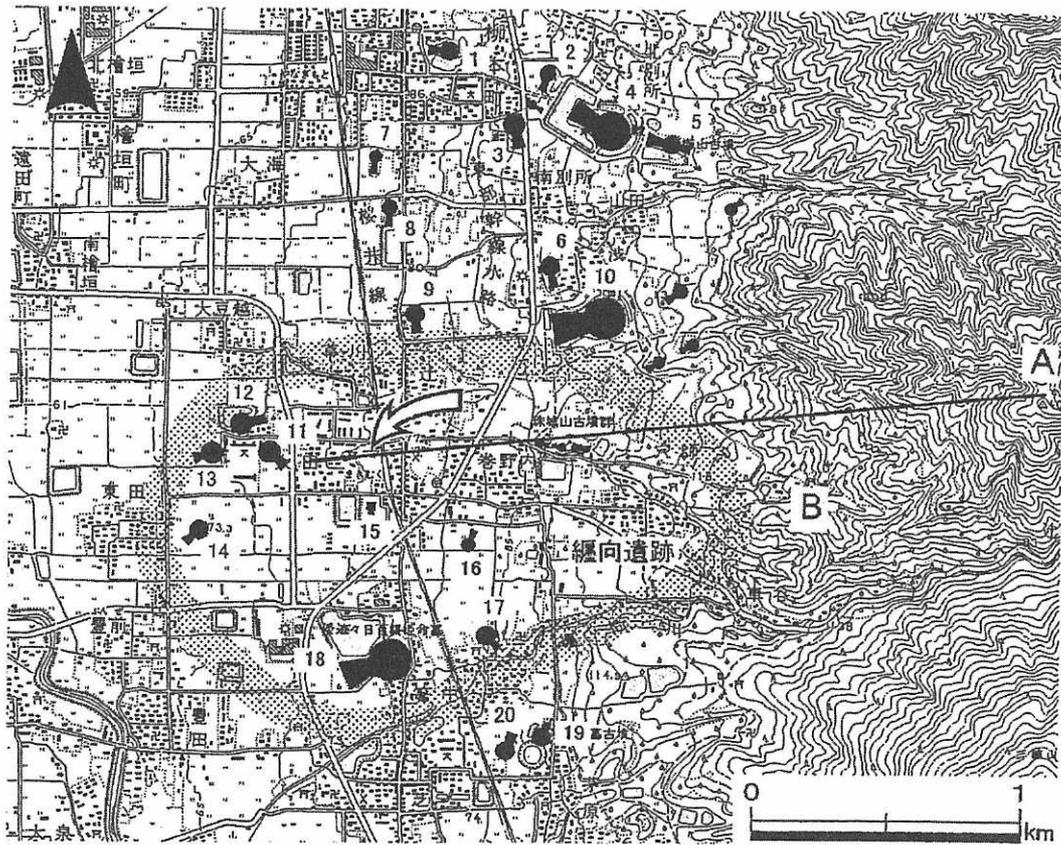
【史料④】の雄略段の記載がそれです。雄略天皇の王宮は長谷朝倉宮^{はつせ}でした。天皇はそこに聳える百枝槻の下で新嘗の祭儀をおこなった後の直会にあたる豊楽の宴席に臨んだわけです。新嘗とは、その年の初穂を神に捧げ、神と天皇がそれを共に食す祭儀です。その祭儀の場が百枝槻の下ということは、槻が「神の領域」と「人の領域」の接点で、いわゆる依り代と考えられたことがわかります。その宴に、伊勢国三重郡から差し出された三重^{みえのうねめ}姫が天皇に蓋を捧げた折り、一枚の落ち葉が蓋に落ちたのをとがめた天皇は彼女を斬ろうとしたその時、姫は歌をもって落ち葉の来歴を語ることで罪を許されます。

あまがたりうた
天語歌と呼ばれる歌のひとつとして語られるその歌は、纏向日代宮^{まきむくのひしろのみや}に聳える百枝槻、その上の枝は天を覆い、中の枝は「あ妻」を覆い、下の枝は「夷」^{ひな}を覆う巨樹だと歌うのです。「あ妻」は国土の縁端を意味し、「夷」とは王権にいまだ従わない夷狄の領域を指します。ようするに日代宮の百枝槻

は地上のすべてを覆う宇宙樹で、その支配者が纏向日代宮に坐す天皇だということを書いてあげ、続いて百枝槻の上の枝先の一葉が、中の枝先に振れ、それによって中の枝先の一葉が下の枝に振れ落ち、その下枝から振れ落ちた一枚の槻の葉が蓋に落ちたのだということです。上枝の振動はすなわち天の意志にほかならず、その波動が順に下枝まで伝わり、そこから落ちた一枚の槻の葉が焔の捧げる蓋に浮かぶことになったと歌われます。そこには天皇が天の下を治めるという行為こそ、天の差配によることが明確に語られているではありませんか。

『古事記』の話では、雄略天皇の長谷朝倉宮の百枝槻の下での豊楽という場面を設定しておきながら、歌では纏向日代宮の百枝槻の下へと舞台が転換します。纏向日代宮はヤマトタケルの父にあたる景行天皇の王宮にあたり、そこは長谷ではありません。なぜこのような話の展開になるのでしょうか。私はワカタケル(雄略)が、ヤマトタケルに命じて列島の征服戦争を行った景行天皇の王権を受け継ぐ者であると語ろうとしたものと考えます。ヤマトタケルとワカタケル、ふたりのタケルの関連にはさらに検討を深めなければなりません。いずれにせよ纏向の王宮・長谷の王宮では、ともに槻の巨木が聳え、その樹下が新嘗の祭場だったという伝承は、王権にとって槻が聖樹であったことを語ってくれます。

ヤマト王権が三輪山麓、磯城(師木)の地に興ったことは間違いありません。桜井市にある纏向遺跡がその最有力候補の遺跡です。私が『聖樹と古代大和の王宮』(中央公論新社、2009)を書き、古代ヤマト王権と聖樹とされた槻を論じたのは、纏向遺跡から大型建物跡が発掘される直前でした。【図6】の地図に纏向遺跡の範囲を示しましたが、そこに入れました白抜き矢印の先端が2009年秋に掘立柱建物跡群が発掘された地点です。3世紀前半期の遺構群と考えられています。そして【図7】が当該の建物遺構と神戸大学の黒田龍二さんによる復元図です。遺構図をご覧のとおり、3~4棟の掘立柱建物跡がほぼ東西に延びる中軸線上に並んであることがおわかりいただけますでしょう。一番東の建物が床面積238平方メートルという当時では列島最大



A:斎槻岳 B:穴師坐兵主神社

図6. 纏向遺跡と斎槻岳(橋本, 2011に加筆)

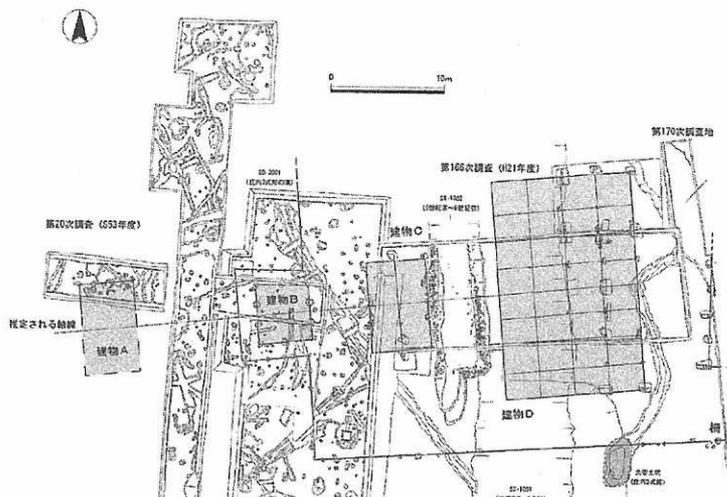
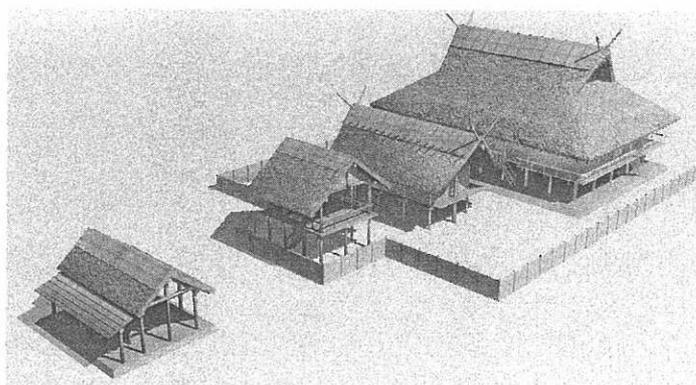


図7. 纏向遺跡の建物遺構群と復元図(黒田, 2012に加筆)

の建物と推定されています。話は逸れますが、この大型建物跡のすぐ南にある土坑から2765点という大量の桃の種が発掘されています。種のなかには果肉が炭化した資料が幾つもある事実から、この桃は食用として用いられた残滓ではなく、桃の果実そのものが多量に埋められていたことがわかりました。ということは桃がなんらかの祭儀に利用された、言葉を換えれば、供物とされた後、穴を掘って納められたことが想定されます。

桃の実といえば、古代中国の仙界、崑崙山に坐す西王母の宮殿が蟠桃宮と呼ばれ、そこの桃果を食べれば三千年とか六千年の齢を得ると信じられ、西王母は神仙の道をもとめる漢の武帝のもとを訪ね、その桃の実を与えたといわれます。ようするに不老長生の道を求める仙界にあって、桃は非常におめでたい西王母の果実と考えられたのです。初期ヤマト王権時代に首長墓の副葬品のひとつであった神獸鏡が、神仙世界を表出していることはご存じのこと。さらに邪馬台国の女王卑弥呼がもっぱら信仰した「鬼道」とは、不老長生を願う神仙の教えだったと考えられます。本日は邪馬台国問題には触れませんが、纏向遺跡の建物群と卑弥呼時代が重なることは無視できません。

再度【図6】をご覧ください。大型建物遺構が検出された白抜き矢印のあたりから東方向に一本の線を引いています。この線は【図7】の遺構図に見えます建物群を貫く中軸線を東に延長した線です。この線は正東西ではなく、東で4～5度北に振れる、変則的な方向を指します。その延長線上にありますAが^{ゆづきがたけ}斎槻岳なのです。ちょうど三輪山の真北に位置します。『万葉集』に「あしひきの山河の瀬の響るなへに弓月が嶽に雲立ち渡る」とみえる「弓月が嶽」です。「斎槻が嶽」とも表記されます。「斎槻」とは神の依代である聖なる槻のこと、『万葉集』巻11に「天飛ぶや軽の社の^{いわいつき}斎槻」とみえ、軽社の神木に槻がなっていたことがわかります。その斎槻岳を向いたように建物群が中軸をそろえるという点が気になってしかたありません。私は纏向遺跡の建物群が造営されるにあたって、造営地を決定した後に、斎槻岳に聳える槻を基点に軸線を決定したのではないかと考えています。その槻が斎槻岳の山頂にあったとはかぎりません。山のなかに、ひときわ大きく繁り聳える槻を聖樹

とみなして軸線を決定したのでしょうか。

崇神天皇の宮は「師木水垣宮(記)」・「磯城瑞籬宮(紀)」、垂仁天皇の宮は「師木玉垣宮(記)」・「纏向珠城宮(紀)」、景行天皇の宮は、さきほどからお話申し上げている「纏向日代宮(記・紀)」です。垂仁の王宮名はおそらく同じ王宮を指していることは間違いないでしょう。「磯城」は磯城郡という大地名で、「纏向」はそこに含まれる小地名であって、崇神・垂仁・景行の初期ヤマト王権が纏向の地に王宮を営んだことは確かでしょう。その纏向日代宮を讃える天語歌で、纏向の王宮に聳える百枝槻が歌われていたことと、纏向遺跡の建物群の中軸線が斎槻岳に向かっている点は大変興味深い事実として留意しておく必要があります。

これまでの纏向遺跡の発掘調査では、この度の建物群より後の段階(3世紀中・後葉)の王宮跡と考えられる地点は、【図6】の地図中、遺跡ナンバー10の景行天皇陵とされる渋谷向山古墳と呼ぶ前方後円墳の南から、珠城山古墳群という文字の間の広い地域にあると見られています。まさに斎槻岳の麓にあたる場所です。

さらに用明天皇(31代)の王宮は『日本書紀』で「いわれのいけのへのなみつきのみや磐余池辺双槻宮」とみえます。『古事記』にみえる「池辺宮」と同じ王宮に間違いありません。磐余池の傍らに聳える二本の槻、または二股に分かれた吉兆とされる連理の槻が宮号の由来となっていることがわかり、その双槻が、磐余の王宮を象徴する聖樹、斎槻だったことは間違いないでしょう。

纏向・長谷・磐余と、歴代のヤマト王権の王宮のあった場所に聖なる槻の伝承が纏わり付いている事実に注目する必要があります。では飛鳥はどうでしょう。皆様は飛鳥寺の西にあったという槻を思い出されたと思います。中臣鎌足(鎌子)が中大兄皇子(よしみ)と誼を通じることとなった蹴鞠の場が法興寺の槻の樹下であったという『日本書紀』皇極3年条はよく知られています。この槻は、後の天武・持統朝に再三登場します。その樹下は多禰(たね)・大隅の隼人・蝦夷らを饗応する場として利用されます。またそれ以前の斉明朝には、槻の記述はないものの、飛鳥寺の西でとから観貨羅やみしはせ肅慎・蝦夷らが饗応されています。

どうやら飛鳥寺の西は王権にとって蕃夷と認識されていた人々を饗応し、王化をすすめるための祭儀場であって、王宮の象徴となる聖樹とみなされてはいなかったようです。

では飛鳥に斎槻はあったのでしょうか。【史料⑤】は『日本書紀』齊明2年条です。そこには後飛鳥岡本宮を正宮として造営し、^{たむのみね}田身嶺の上の二本の槻の傍らに^{ふたつきのみや}観(高殿)を建て、そこを^{あまつみみや}両槻宮、また天宮と呼んだと記されます。田身嶺は現在の多武峰という説と、飛鳥宮跡(岡本宮跡・後岡本宮跡・浄御原宮跡の諸遺構が重なっています)のすぐ東の酒船石が乗る丘陵の2説があり、私は後説に与しています。

この両槻宮という宮号の名付けは、先にお話ししました用明天皇の磐余池辺双槻宮の宮号と同じではありませんか。さらにそこを「天宮」という名付けは、百枝槻の上枝が天を覆うと歌われた纏向日代宮を讃える天語歌を連想させるではありませんか。百枝槻の樹下が天下を治める天皇の王宮の場にふさわしいとされた纏向日代宮や長谷朝倉宮の観念が飛鳥時代まで繋がっている点に注目しないわけにはまいりません。歴代の王宮の地に聳える槻が王宮と大王系譜の象徴であったとみてとることができます。

すると辰巳はもうひとつ飛鳥の槻に関する古代史上の重要な記録を忘れていたぞという声が聞こえます。それが【史料⑦】です。乙巳の変により蘇我本宗家が滅亡した直後、孝徳天皇や中大兄皇子が大槻の樹下に群臣を集め天皇政治への忠誠を誓盟させた『日本書紀』の記載です。最近の古代史研究では、この大槻が飛鳥寺の西にあることが自明のように考えられ研究書や専門書の多くが「飛鳥寺の西にある」という言葉を付け加えて論じています。でもよく書紀の記載をご覧ください。どこにも大槻の聳える地点は書かれていません。研究者は史料にまず真摯でなければなりません。彼らがそのように考えるのは、先にもふれました皇極3年の法興寺の槻の樹下での中大兄皇子と中臣鎌足の出会いという記事に引きずられているのです。『日本書紀』をいくらひっくりかえしても、誓盟の場となった大槻が飛鳥寺の西に聳えていたとは書かれていません。

る軽のチマタ以外に考えられません。【図8】に黒丸で標示した場所が軽のチマタです。【史料⑧】には天武10年に行われた軽市(チマタ)での飾馬検閲の儀礼の次第が記述されています。そこに槻という樹種はみえませんが、上級の官人は樹下に「列り坐り」、大路を南から北に進む飾馬を検閲するセレモニーが行われました。軽市は大路が交わる要衝で、そこに官人が列り坐ることのできる大きな枝を伸ばした大木が聳えていた情景が見えてきます。大路とは下ツ道のこと。さきにも触れた「軽の社の斎槻」という万葉歌は、大槻を依代とする市神の社の存在をも語ってくれます。蘇我稲目の邸宅のひとつに軽曲殿かるのまがりのとのがあり、それが息子の馬子つきのまがりのいに伝領されて槻曲家と呼ばれたのも、軽に槻があったことを示しています。それが「大槻」にほかなりません。乙巳の変の後の誓盟の場は軽のチマタの大槻の樹下に違いありません。「大槻」といわれるほどの巨樹、まさに天下支配の象徴的な樹木と考えられたのでしょう。この大槻が下ツ道設定の起点となったと考えられます。

やがて平城京を造営するに際して、下ツ道が中軸とされます。軽のチマタから真っすぐ北に23キロ余、そこに平城宮の大極殿が位置します。現在、復元された平城宮大極殿の中に高御座たかみくらがしつらえられていますが、それはまさに天につながる軽の大槻を真南に望む位置にあるのです。このようなことを考える研究者は誰もいませんが、そうしたコスモロジーのもとに王宮が造営されたと考えたいのです。

では軽の大槻の聖性の根源はどこにあるのでしょうか。そもそも軽の地は応神天皇かるのしまのあきらのみやが軽嶋明宮を営んだのが始まり、もちろん大槻が聳える好地だったからでしょう。後に孝徳天皇や文武天皇も、即位前は軽皇子と呼ばれ、軽の地が代々の王権にとって重要な施設があったことがうかがえます。しかしそれだけではありません。【史料⑥】をご覧ください。垂仁天皇の皇子ホムチワケは生まれながらものを言うことができませんでした。それが出雲大神の祟りであることが占いによって明かにされ、皇子は出雲大神を拝むことで言葉を獲得するため出雲へ向かうことになります。その際、大和から出雲にかけてのルートが占いにより決まります。那良戸ならと(奈良坂)や大坂戸(大坂)は占

に凶、ただ木戸^{きと}だけが吉のルートだということです。「戸」とは入口のこと、奈良坂や大坂は大和への入口にあたる境界です。「坂」は「境」でもあるわけです。紀州回りのルートを紀路と言いますが、奈良盆地から紀路にかかる境の地点を木戸と言ったのです。【図8】に紀路という文字を入れましたが、直線で延びる下ツ道は軽のチマタから南はわずか400メートルばかりが真っすぐで、その後は丘陵にかかるため、地形なりに緩やかに曲りながら高取川(古代の桧隈川)に沿うように紀伊をめざします。逆に言えば、紀伊から奈良盆地に参入したところに大槻が聳え立っていたわけです。軽の大槻の地が木戸であったかもしれません。

軽のチマタの大槻は、古代奈良盆地を南北に貫く下ツ道と、東西に伸びる山田道の起点であるとともに、巨樹として天空高く聳えることで、天神の子孫(日の御子)による天下統治の象徴となる聖樹として、樹下には社が設けられていました。換言すれば大槻は天とつながる坂であったわけで、それは大和から紀伊に通じる坂(戸)でもあったと整理できると思います。

4、恐きや神の御坂

再度【図8】をご覧ください。軽の大槻を起点として北へ、奈良盆地を北に縦断する直線道の下ツ道についてお話ししましたが、その東に約2キロ間隔で並行するさらに2本の直線道、中ツ道・上ツ道があることはご存じでしょう。これらの古道が壬申の乱にも登場することから7世紀の前半には建設されていたと想像されます。またこの南北の直線道と交わる東西の道路が2本あります。南の古道は横大路と呼ばれ、東は伊勢へ、西は河内につながる幹線道で推古朝までには整備されていたと思われます。その横大路を東に、初瀬川沿いを遡った最上流部にある峠が墨坂。宇陀との境にあたる地点です。一方、横大路を西にたどると、当麻で二上山の北と南を越える2本の道に分岐します。北麓を河内に越える坂が大坂。南を越える道は當藝麻道と呼ばれ、現在は竹内越えといわれています。墨坂と大坂。そのふたつの坂はヤマト王権中枢のあった奈良盆地南部に至る東西の入口、すなわち戸にあたると認識



図9. 楯と矛?を持つ人物
(狩獵文鏡)(設楽. 1993)

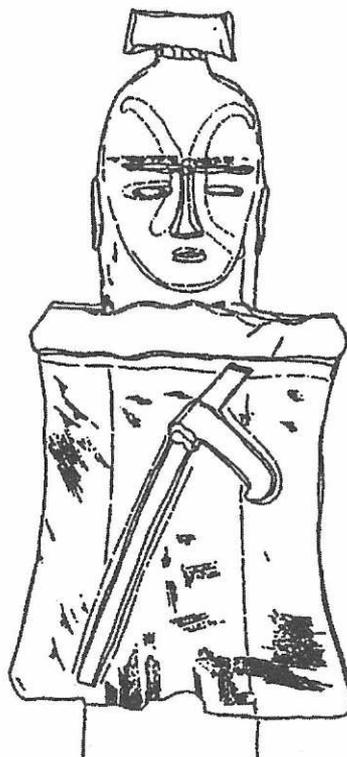


図10. 楯と戟をもつ盾持人埴輪
(江南町. 1995)

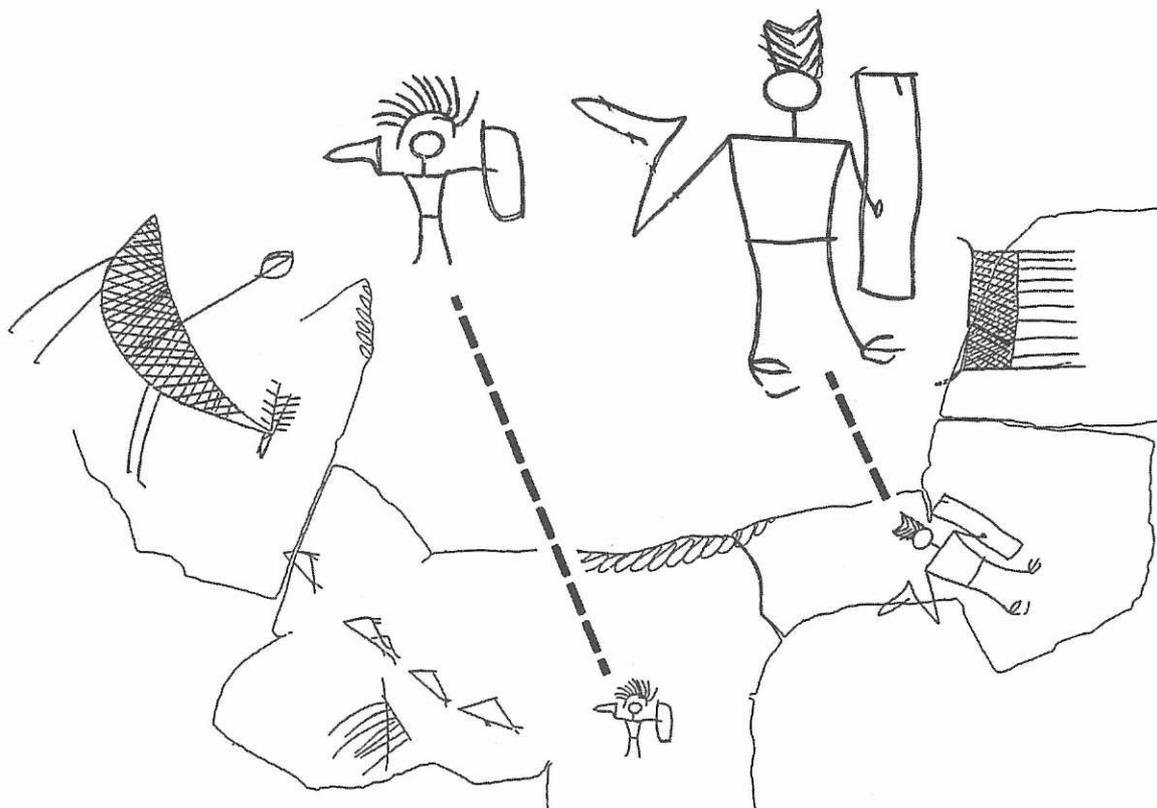


図11. 清水風遺跡出土の土器絵画(田原本町教委. 1996)

され、そこを守る祭儀をうかがわせる『古事記』崇神段のくだりを史料⑨に載せました。ほぼ同じ記述は『日本書紀』にも見えます。

墨坂神を赤色の楯と矛をもって祭り、また大坂神を墨色の楯と矛をもって祭るといふ、そうすることで、さまざまな邪霊の侵入から大和の国中くんなかを守ろうとしたわけです。邪霊を圧服させる祭儀とみることができます。

関連して【図9】～【図11】を準備しました。【図9】は群馬県出土の「狩獵文鏡」と呼ばれてきた銅鏡です。狩獵の場面を表出したと考えるのは難しく、外区には一方の手に楯を持ち、もうひとつの手に矛や刀などの武器を振りかざした人物が10人描かれています。この情景に先の崇神記の坂の神祭りの記事が思い出されてしかたありません。

また【図10】は埼玉県の埴輪生産関連遺跡から発掘された盾持人埴輪げきと称される形象埴輪で、正面に盾が、盾の上に戟と呼ばれる武器が表出されます。盾持人埴輪を古墳に立てる場合、正面が古墳の外に向くように、すなわち外部から被葬者の眠る他界空間への邪霊の侵入を防ぐという心意がありと見て取れる事例が多い遺物です。まさに此界と他界を境する場(坂)に立つ埴輪と言えます。それが坂を守るという点で、崇神記にみえる墨坂・大坂での祭儀につながる心意をみてとらなければなりません。

さらに弥生時代中期後葉(紀元前1世紀頃)の資料である【図11】は、奈良県田原本町の清水風遺跡から出土した土器に描かれた線刻絵画です。この遺跡は唐古・鍵遺跡という巨大な環濠集落の分村と考えられ、両方の遺跡から出土する土器絵画は全国出土の弥生絵画資料の半分を超えています。そのひとつが【図11】ですが、そこには大小2人の人物が、一方の手に楯を持ち、反対の手に戈という武器をかざす姿が描かれます。その姿は武器の種類こそ違いますが先の狩獵文鏡の人物像に似ているではありませんか。2人が戦闘をしているようには見えません。武器を持って祭儀を行う、武舞の情景ではないでしょうか。

2人の横には高床建物が描かれます。当時の住まいは竪穴式建物が一般的ななか、土器絵画に描かれる建物のほぼすべて近くが高床建物です。というこ

駿河国富士郡の姫名郷^{ひな}、さらに越後国頸城郡の夷守郷^{ひなもり}なども王権にとってのさまざまな意味での夷^{ひな}と観念される世界へ向かう境と認識された場所と理解すべきでしょう。ヤマトタケルの東征物語りでは『古事記』は足柄坂において、『日本書紀』が信濃坂で、坂や山の神が白鹿となって顕現するのも、そこが「神の領域」と「人の領域」の接点であるとともに、「こちらの世界(大和的世界)」とその「周縁世界」の境界域という観念が読み取れます。『万葉集』では信濃坂は「ちはやぶる神の御坂」、また足柄坂も「恐きや神の御坂」と歌われます。坂がもつ異界性をよく語る言い回しではありませんか。さきの【図8】で、横大路の北にある奈良盆地を東西に走るもう一本の古道(竜田道)の大和国と河内国^{かしこのさか}の境を「懼坂」と呼ぶのも、坂の神^{かしこ}を畏む心に由来することは自明のことでしょう。後に触れますが、信濃坂は現在も神坂峠と呼ばれています。『日本書紀』齊明6年条にはこの神坂を「巨坂(オオサカ)」と呼んでいたとみえます。「大いなる御坂」の意味でしょう。

最後に視点を大和から地方に転換してみたいと思います。鈴木景二さんの

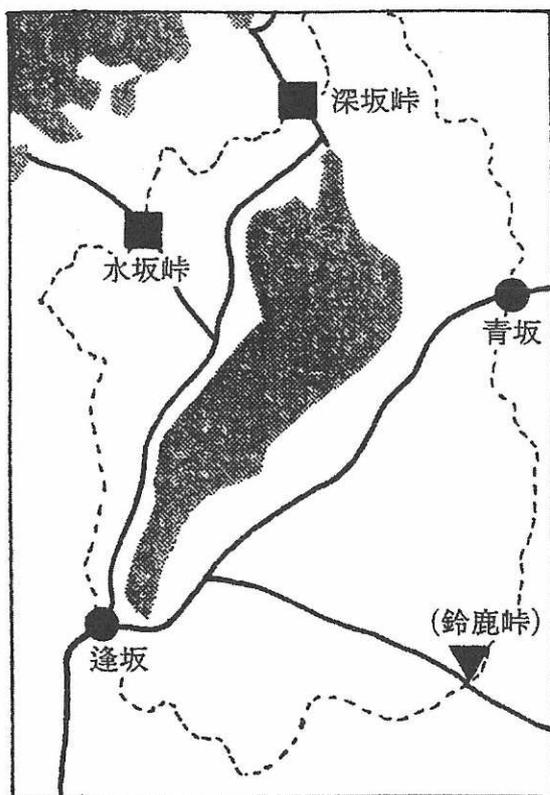


図13. 近江国の坂(鈴木, 1998)

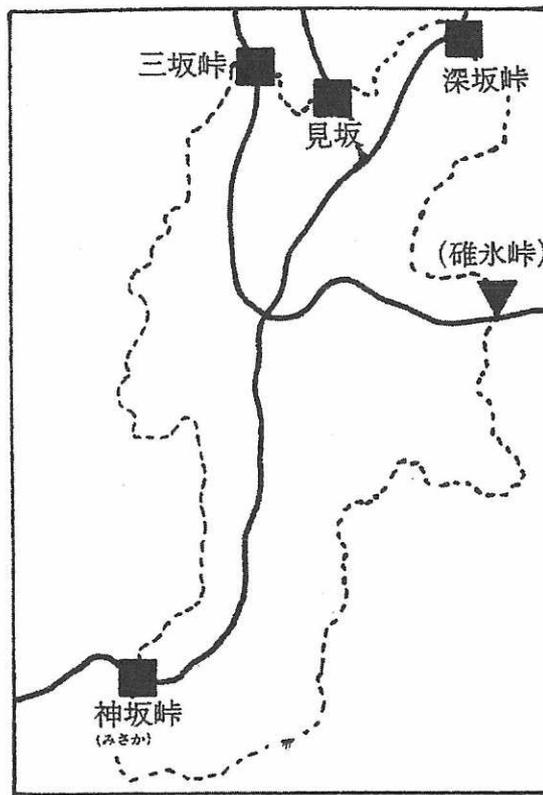


図14. 信濃国の坂(鈴木, 1998)

作成された地図を使わせていただきました。【図13】は近江国の主な古道の国境にみえる坂地名をあげたものです。逢坂は先にみた大化改新の詔にみえる、近江狭狭波合坂山のこと、また東山道を美濃に越えたところにある青坂は、そこにある青坂神社せいばんの社名で、そこにオオサカという坂地名の存在が推定されます。さらに、北陸道を越前に越える深坂峠は。現在はフカサカ峠と呼び、下をJRの北陸トンネルが通過する場所です。その表記にミサカという往時の古称がうかがえます。さらに琵琶湖の西に行く北陸道の高島から若狭に至る国境の水坂峠とミサカ呼称がみられます。

また【図14】は信濃国の坂地名です。まず美濃との国境がさきほどお話しをしました神坂峠です。ただいまは中央自動車道の恵那山トンネルで峠の下を簡単に通過することができますが、古代には海拔1560メートルの山稜の鞍部を越える難路でした。岐阜県側から車で登ることができます。ぜひ神の御坂の景観を体感していただきたいものです。そこには國學院大學が発掘調査されました神坂峠祭祀遺跡があり、なかでもたくさんの滑石で製作された勾玉・鏡形・剣形・刀子形・馬形などの資料が、古墳時代中期後葉から後葉前葉の土師器とともに出土し、該期の峠神信仰の存在を示してくれます。これら滑石製品は滑石製模造品と呼ばれていますが、私は「模造品」という用語に物凄く抵抗があります。「模造」という言葉に「偽物」という意味あい**かたしろ**が強く感じられるからです。ぜひ「形代」と呼んでいただきたいと思えます。それら滑石製形代のいずれにも小さな穴が開けられています。穴があるということは、紐を通して榊などに取り付けて幣としたことを想定させます。そこは坂神の祭り場だったと考えられる地点です。

【図14】をご覧いただくと、信濃から越後へ越える古道が3本あり、いずれもがミサカと名付けられるのも興味ある事実です。地図が近江や信濃という国単位で描いていますので、そこにみえるオオサカやミサカという坂がそれぞれの国にとっての境界とみてしまいがちですがそうではありません。それらの坂は隣国の若狭や越前、また山城や美濃・越後にとっても境界であることに違いありません。坂を境界とする両国にとって、そこは「神の領域」だっ

たことに目を向けなければ本質を見誤ります。そこは天につながる神の世界との接点であったという視点を忘れてはなりません。

本日は磐座・高殿・宇宙樹である槻、そして坂というマツリゴトの場に通底する古代人の心意を考古資料と『古事記』世界のなかに考えてみました。御清聴ありがとうございました。(拍手)

⑨ 即ち意富多多泥古命を以て神主と為て、御諸山に意富美和の大神の前を拜き祭りたまひき。又伊迦賀色許男命に仰せて、天の八十毘羅訶を作り、天神地祇の社を定め奉りたまひき。又宇陀の墨坂神に赤色の楯矛を祭り、又大坂神に墨色の楯矛を祭り、又坂の御尾の神及河の瀬の神に、悉に遺し忘るること無く幣帛を奉りたまひき。
 (『古事記』崇神段)

【挿図出典一覽】

- 大阪府教育委員会 1985 『美園』
- 岡山県教育委員会 1974 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山県文化財保護協会
- 小澤毅 2003 『日本古代宮都構造の研究』青木書店
- 黒田龍二 2012 『纏向から伊勢・出雲へ』学生社
- 江南町 1995 『江南町史 考古資料編1』江南町史編さん委員会
- 設楽博己 1993 「狩猟文鏡の絵を読む」『歴博』第六一号 国立歴史民俗博物館
- 鈴木景二 1998 「地方交通の諸相」『古代交通研究』第八号 古代交通研究会 八木書店
- 辰巳和弘 1992 『埴輪と絵画の古代学』白水社
- 辰巳和弘 2006 『聖なる水の祀りと古代王権 天白磐座遺跡』(シリーズ遺跡を学ぶ33)新泉社
- 辰巳和弘 2009 『聖樹と古代大和の王宮』中央公論新社
- 田原本町教育委員会 1996 『清水風遺跡第2次発掘調査および出土遺物について』
- 橋本輝彦 2011 「前方後円墳の出現を巡る諸問題―纏向遺跡からの視点―」『ヤマト王権はいかにして始まったか』

④ 天皇、長谷の百枝槻の下に坐しまして、豊樂為たまひし時、伊勢国の三重姝、大御盞を指拵げて献りき。爾して其の百枝槻の葉、落ちて大御盞に浮かびき。其の姝、落葉の盞に浮かべるを知らずて、猶大御酒を献りき。天皇其の盞に浮かべる葉を看行はして、其の姝を打ち伏せ、刀を其の頸に刺し充てて、斬らむとしたまひし時、其の姝、天皇に白して曰ひけらく、「吾が身を莫殺したまひそ。白すべき事有り。」といひて、即ち歌曰ひけらく、

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日がける宮 竹の根の 根蔓ふ宮
八百土よし い築きの宮 真木さく 檜の御門 新嘗屋に 生ひ立てる 百足る 槻が
枝は 上枝は 阿米を覆へり 中つ枝は 阿豆麻を覆へり 下枝は 比那を覆へり 上
枝の 枝の末葉は 中つ枝に 落ち触らばへ 中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に 落ち
触らばへ 下枝の 枝の末葉は あり衣の 三重の子が 指拵せる 瑞玉盞に 浮きし
脂 落ちなづさひ 水こをろこをろに 是しも あやに恐し 高光る 日の御子 事の
語言も 是をば
とうたひき。故、此の歌を献りつれば、其の罪を赦したまひき。
(『古事記』雄略段)

⑤ 飛鳥の岡本に、更に宮地を定む。……号けて後飛鳥岡本宮と曰ふ。田身嶺に、冠らしむるに
周れる垣を以てす。復、嶺の上の両つの槻の樹の辺に、観を起つ。号けて両槻宮とす。亦是
天宮と曰ふ。
(『日本書紀』斉明二年是歲)

⑥ (本牟智和氣王をして出雲の大神の宮を拜ましめに遣はさしめんとせし時)即ち曙立王、菟上
王の二柱を其の御子に副へて遣はしし時、那良戸よりは跛盲遇はむ。大坂戸よりも亦跛盲遇
はむ。唯木戸ぞ是れ掖月の吉き戸と卜ひて出で行かしし……
(『古事記』垂仁段)

⑦ 乙卯に、天皇・皇祖母尊・皇太子、大槻の樹の下に、群臣を召し集めて、盟曰はしめたまふ。
……天豊財重日足姫天皇の四年を改めて、大化元年とす。
(『日本書紀』孝徳即位前紀)

⑧ 親王より以下及び群卿、皆輕市に居りて、装束せる鞍馬を檢校ふ。小錦より以上の大夫、皆
樹の下に列り坐れり。大山位より以下は、皆親ら乘れり。共に大路の隨に、南より北に行く。
(『日本書紀』天武十年十月)

【史料①—⑨】

①此の天皇の御世に、役病多に起りて、人民死にて盡きむと為き。爾に天皇愁ひ歎きたまひて、神牀に坐しし夜、大物主大神、御夢に顕れて曰りたまひしく、「是は我が御心ぞ。故、意富多多泥古を以ちて、我が御前を祭らしめたまはば、神の氣起らず、国安らかに平ぎなむ。」とのりたまひき。
 (『古事記』崇神段)

②此より以後、天皇神牀に坐して晝寝したまひき。(中略)是に其の太后の先の子、目弱王(中略)其の時に當りて、其の殿の下に遊べり。
 (『古事記』安康段)

③天皇、乃ち沐浴齋戒して、殿の内を潔淨りて、祈みて曰さく「……ねがはくは亦夢の裏に教へて、神恩を畢したまへ」とまうす。此の夜の夢に、一の貴人有り。殿戸に対ひ立ちて、自ら大物主神と称りて曰はく……
 (『日本書紀』崇神七年二月)